寺ハ八橋山無量寺トテ、庭池ニ杜若ヲ植タリ、寺ヨリ少西ヘ行ケバ、松ノ下ニ小サキ五輪アリ、土俗業平ノ塚トイフ、謬妄ハ論ズルニヲヨバズ、

〔紹巴富士見道記〕廿九日〇永祿十年五月　岡崎へとおもひ立に、八橋の杜若斷絶の遺恨を歎きけるを、代官齋藤吉十郎聞傳へて、八橋の面馬場と云ふ在所へも、使に樽添、鄕人の古老の名主に下知して可植置よし有けるに、諸國の旅人根を引て行く故、跡もなき由と云々、實もと思へるは、橋柱さへ削りとれる事と見えてあり、西に下馬堂と云跡には松一むら、澤の半に時雨の松といふ一本有、餉食ひける木陰可成、東に少し岡あるに石塔あるは、業平の印といへり、在所の人に杜若にはせて植けるに、田になせる地を業平と答たる田を、則今よりして杜若寺にあてをこなふよし、無仁齋永代の折紙書て、早苗を引すて、手づから植渡して、石塔の許へ上り、〇下略

〔水無瀨殿紀行〕三河國に至りぬ、爰なん八橋の跡なりと云ふを見れば、名のみ殘て橋の跡さへなく、小さき川一筋昔忘れず流れたり、

〔丙辰紀行〕八橋

三河國八橋は杜若の名所なる事、在五中將〇在業平原の歌にてかくれなし、今岡崎より池鯉鮒にいたる道より北の方一里ばかりに、それなんむかしの八橋なりとて、所の人はるかに指をさしてをしへ侍る、久敷田となりて今は杜若なし、三四年前余〇林道春が作りける詩にも、古人遺跡鐵鑑步、只有三河杜若名となん、

六々歌中第幾仙、風流千歲慕幽玄、世間一瞬陣迹、杜若爲薪澤作田、

〔宗甫紀行〕八橋と云ふ所に至りぬ、杜若の名所なれば多くあらんと思ひて見れどもなし、近き頃事好める者の、一本二本植たるが、小さき池に生出たり、是なん昔思ふ俤ともなすべし、

〔大猷公御上洛中の詠歌〕四日〇寛永十一年七月　おか崎出御有、やはぎ過させ給ひ、ちかきほとりに八橋と